

社殿以外に「肇社」の文字が刻まれた「礼拝石」と「舞台石」とされる巨石がある(写真 3-6)。眺望は北は玄界灘の宗像大島、長崎県壱岐が望め、南東は英彦山、南西は有明海越しに雲仙普賢岳が遠望できる(写真 3-7)。

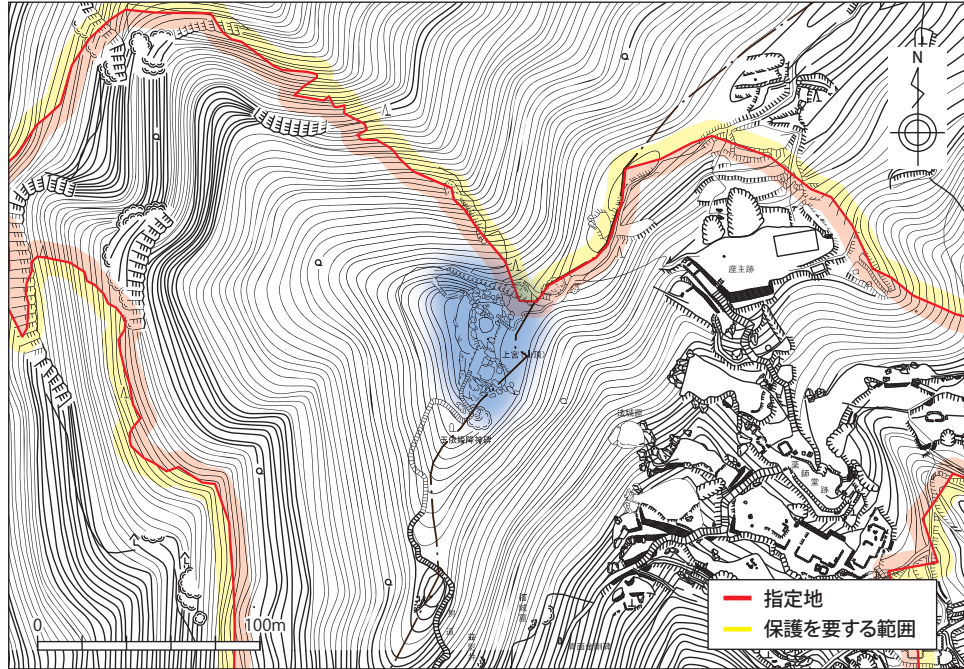


図 3-2 上宮地区位置図



写真 3-5 上宮社殿



写真 3-6 山頂の礼拝石

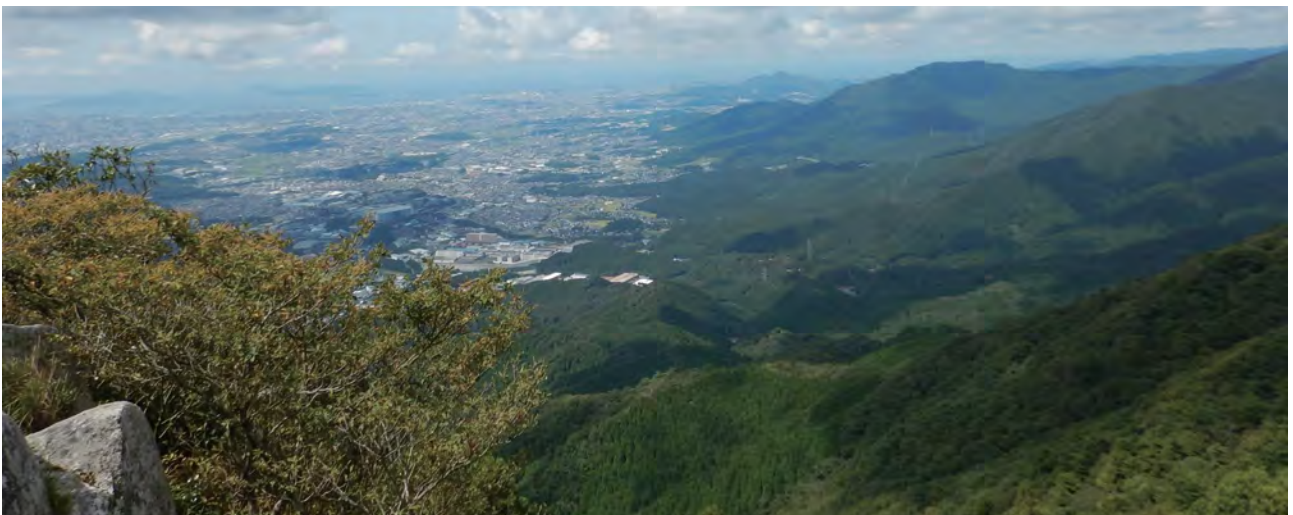


写真 3-7 山頂からの北西側眺望

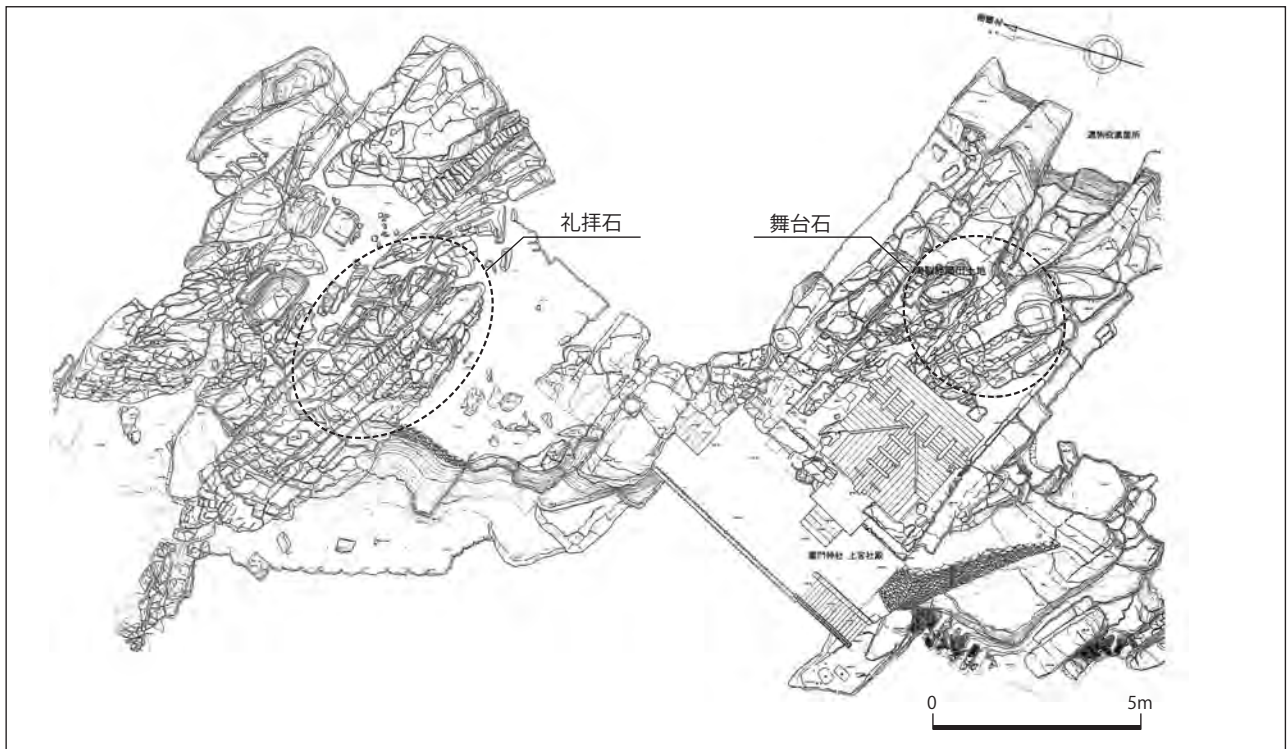


図 3-3 山頂実測図

b. 愛嶽山頂地区

愛嶽山は宝満山の南西にある標高 443m の別峰で、江戸期には「御嶽山」「小岳山」などの標記も見られる。地元では「おたけ」「おだけ」両方の呼称が使われている。

山頂、山中に古代の遺物の散布地としての遺跡であり、近世には山頂に愛嶽(飯綱)神社の社殿等や神社を管理する山伏の財行坊が置かれ、宝満山と一体的な信仰の場とされていた。現在は龍門神社の社地であるが、社殿は無く礎石のみの状況で、最高所に石囲いされた石祠に土製の愛宕勝軍地藏が祀られている(写真 3-8、9)。戦前までは農耕にかかわる牛馬の無事を祈願する参拝所としてにぎわった。山頂付近の様相は、大正末年から昭和初期頃は萱場とされ樹林はなかったようだが、戦後は太宰府市側の大半は雑木林、筑紫野市大石側はスギヒノキの植林地となった。

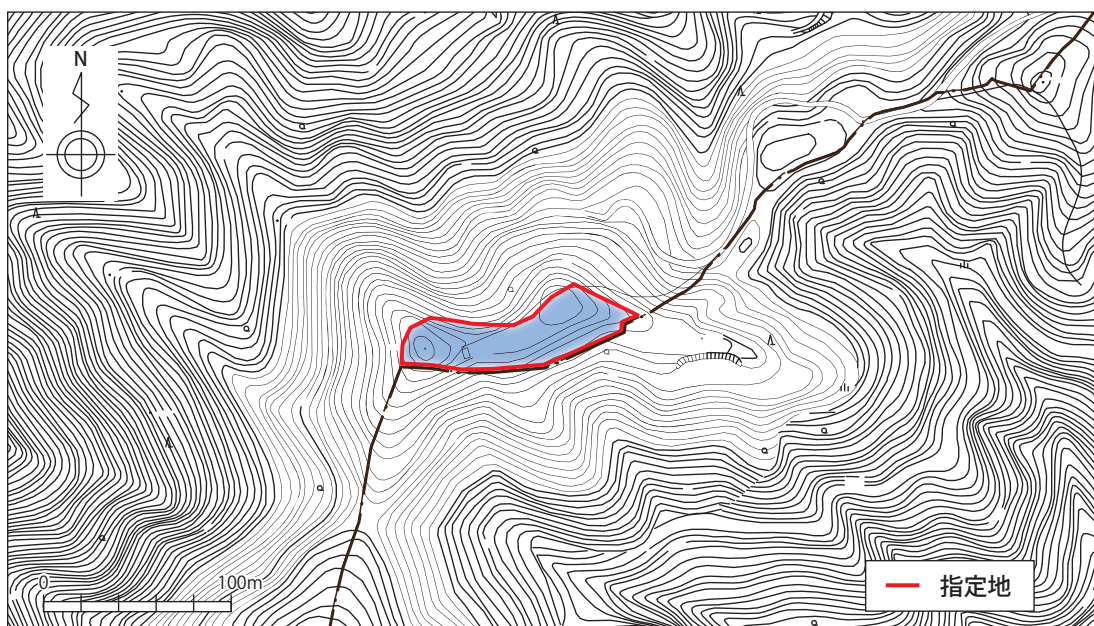


図 3-4 愛嶽山頂地区位置図



写真 3-8 礎石 (旧社殿跡)



写真 3-9 愛嶽山頂の石祠

c. 登拝道

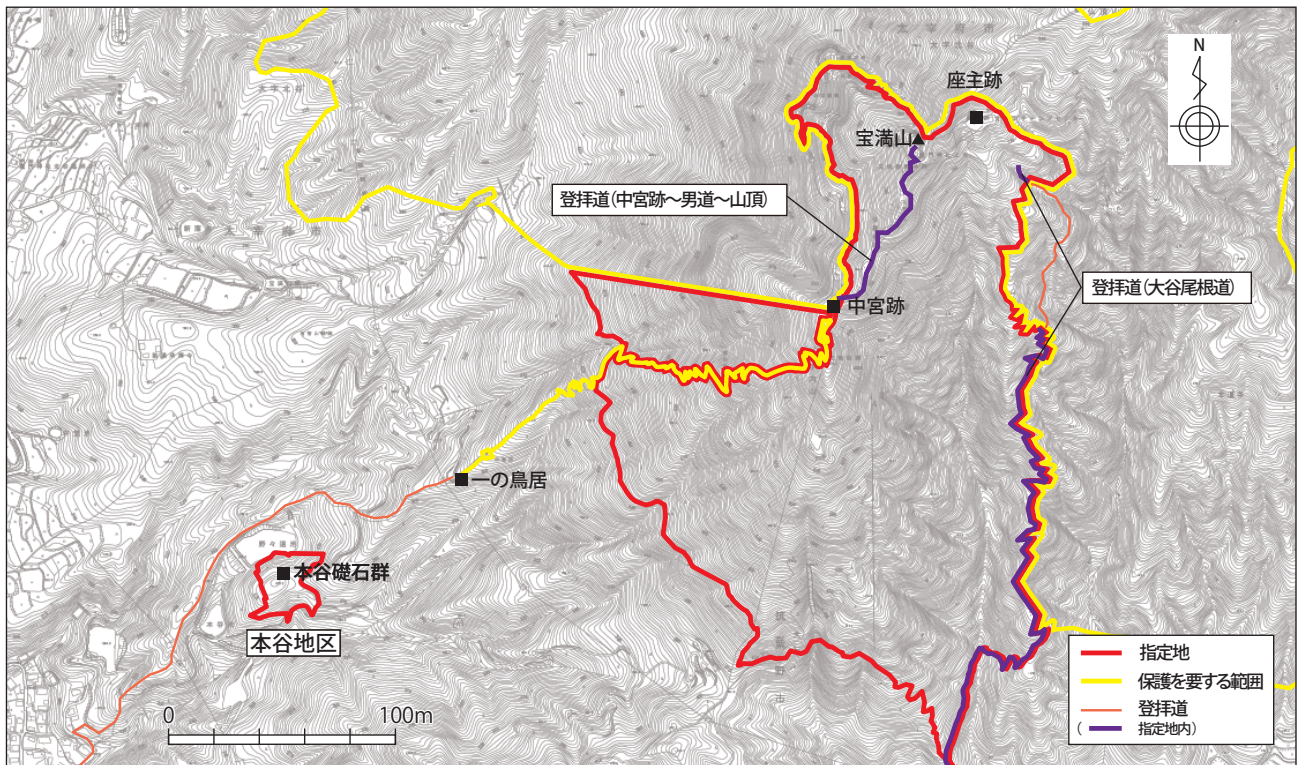


図 3-5 登拝道位置図

竈門神社から上宮のある山頂に至る登拝のルートは、『筑前国続風土記附録』、『宝満山絵図西図』に「戸城戸坂」や「羊腸の路」「百段坂(現在の通称ヒャクダンガンギ)」の名が見られ、江戸時代にはつづら折れの石段を含むルートであったことが知られる。中宮跡から上宮までの道沿いには、磨崖梵字仏もみられ、袖すり岩や馬蹄岩など謂れのある箇所がある(写真 3-10)。山の東斜面においても『筑前国続風土記』には「樋



写真 3-10 袖すり岩

坂」と呼ばれるルート（現在の大谷尾根道）が記載され、複数の登拝のルートがあった事が知られる。平成30年（2018）7月の集中豪雨で西の登拝ルートの通称「百段ガンギ」脇の斜面が崩れ、崩壊した部分には江戸時代の造成面の下層に鎌倉時代の層が現れたことから、登拝道と石垣の一部が中世に遡る可能性を示している（写真3-11）。

江戸初期に成立したとされる『宝満山絵図』によれば、前記の東西の登拝ルートに連なり、後述の西院谷と東院谷の坊をつなぐ小道が網目のように描かれている。位置的な関係性から、これらのルートが現在の複数の登山ルートのもとになっていることは間違いなさそうである。

d. 西院谷地区

西院谷地区のほとんどは太宰府市域に含まれ、竈門神社からの登拝道（登山道）にある殺生禁断碑（写真3-13）から30 m程上部と中宮跡までの山腹に位置する。



写真3-11 百段ガンギ横の崩壊



写真3-12 九州自然歩道の階段

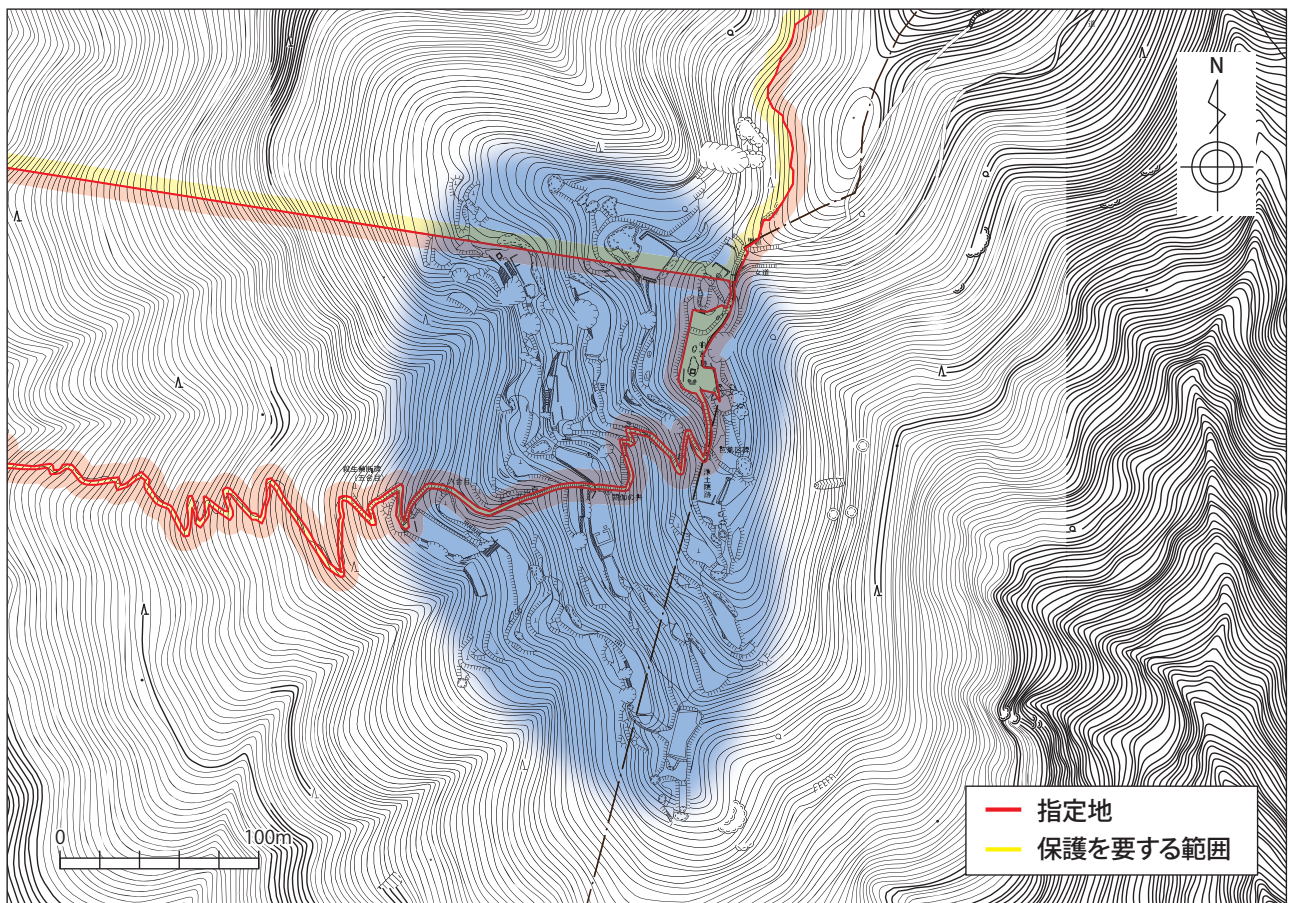


図3-6 西院谷地区位置図

近世に宝満山祭祀に従事した修験道の行者が坊を営んだエリアで、生活施設としての石垣、石段、通路からなる坊跡、堂社跡、井等の水場、墓地とその外延に広がる山林などがある(写真3-14)。近世には庶民による宝満山参拝が盛んに行われるが、この西院谷を通る登拝道を利用していた。

江戸前期の段階において西院谷には財徳坊、亀石坊、財蔵坊、伊多坊、奥ノ坊、岩本坊、山中坊、大谷坊、福蔵坊、経蔵坊の10坊があった(『宝満山絵図西図』)。

山内の草木の管理については宝満二十五坊によるきびしい取り決めがあった。『竈門山水帳』(寛文12年(1672)の文化5年(1808)写し)には14か条の禁忌事項や取り決めが記載されている。それによれば山中には「神地」「寺内(各坊の居所、宅地)」「坊山(各坊の管理地)」「共有地」の別があり、全般的には、山を荒らさないようによく吟味して伐木を行い、その切跡には指示に従って苗木を植えるよう決められ、坊周辺は特に山を荒らさないよう、おおいに茂る様に務める事とされている。

木の伐採については、一尺廻り以上の元木ならびに一尺廻り以下であっても、六種類(松・榎とど(モミノキを指すと思われる)・杉・桜・椎・たぶ)の木は隠密に伐木する事を堅く禁止するようきつい申し合わせがあったとされている。一方で「私領の財木」や「雇人が山に入る」ことを認めており、各坊が管理する預かり山では育林による材木や薪の売買、炭焼きなどの経済活動が里の者を入れることで行われていたことを示している。



写真 3-13 殺生禁断碑



写真 3-14 西院谷坊跡の石垣

○中宮跡

西院谷地区の最高所、標高 730m 付近に広い平坦面があり、現在、中宮跡と称されている。

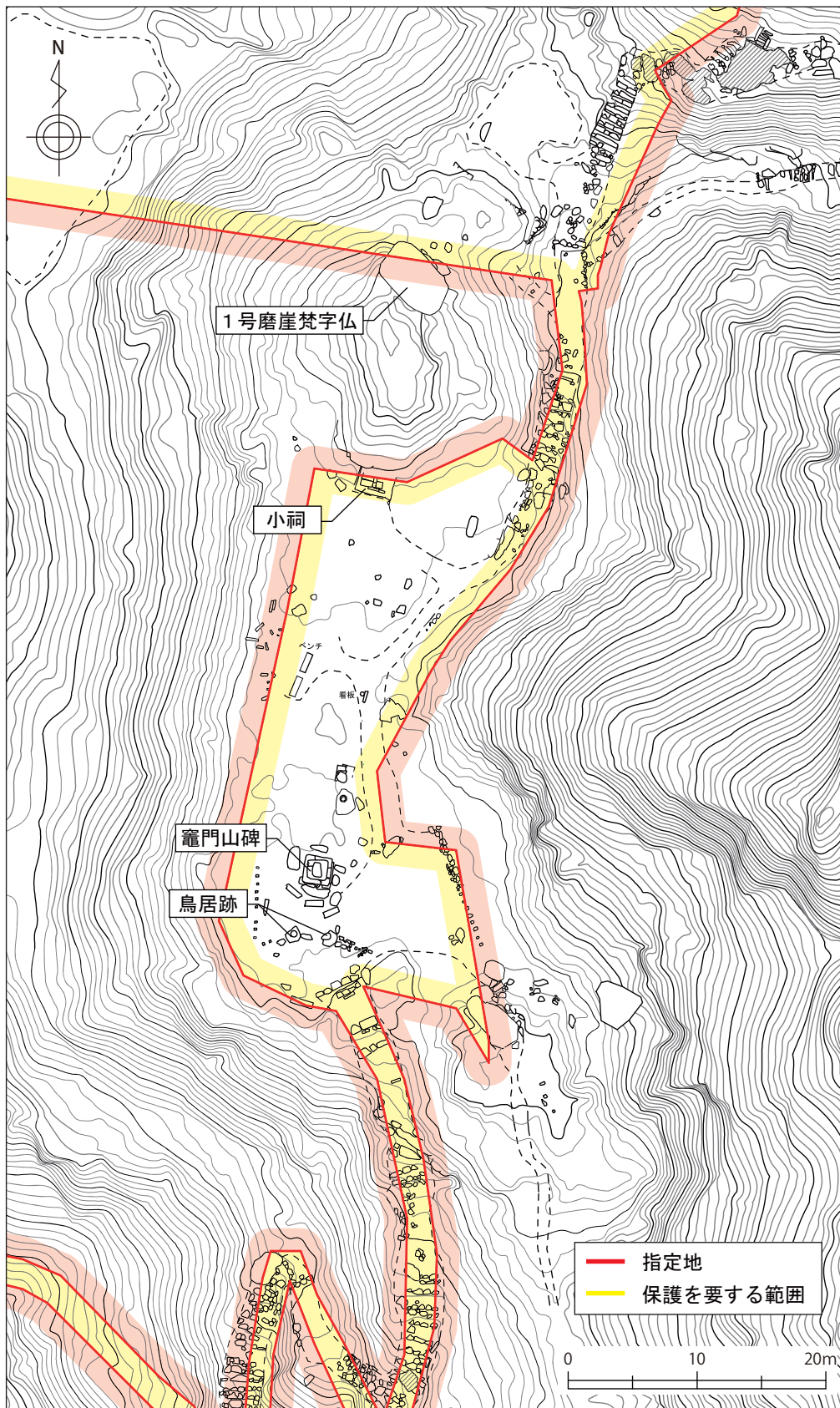


图 3-7 中宮跡実測図

江戸初期の成立とされる『宝満山絵図』には講堂、キロン(祇園)、文殊、荒神、カネツキ堂(鐘楼)、神楽堂などの記載が見られ、寛政9年(1797)の『宝満宮山中絵図』では大講堂と鳥居が描かれ、坊とは一線を画す宗教施設が集中した場所であったことが理解される。『筑前国続風土記附録』では講堂が主体施設であり、周辺の境内に神楽堂と鐘楼があるとされている。『筑前国続風土記拾遺』では、講堂の前に神楽堂、石鳥居二基、後ろに法花(法華)塔が、同所に鐘堂があるとされる。講堂のある場に連なる場所として『附録』には、講堂の後高き所に毘沙門佛、金凝皇子祠、松尾童子社、祇園社が、鳥居の下にいにしへの講堂跡、鳥居の礎石、浄土院(成道院)、その寺内に地藏・文殊と三重の塔があるとされ、『拾遺』では行者堂の南にある大岩に金剛界・胎蔵界、両界の梵字(文保2年(1318)銘)の他、行者堂の北側にある善哉坂の上左の大岩にも種子(梵字)があるとされている。この場所は神仏の堂舎や祠、磨崖仏が集中した箇所で、施設としては「講堂」が中心で、『附録』では堂内には伝教大師作の十一面観音像が本尊であったとの所伝がある。また、『竈門山旧記』(江戸時代前期成立)等によれば、講堂は16世紀には当該地にすでに存在しており、中・近世においては山中での仏教的な中心施設であった。講堂は明治時代になり破却を免れ「神祇殿」として利用され(明治25年(1892)時点)、この頃からこの場所が「中宮」の名称で説明されるようになり(上宮、下宮の名称は15世紀から)、社殿がなくなって以降は中宮跡と呼称された。

現在、講堂跡には礎石と石積基壇に石祠2基が、倒壊した鳥居の前には明治28年の官幣小社昇格記念の「竈門山碑」が残されている。

植物については、地元で植樹発活動をしてきた「筑紫石楠花倶楽部」が植栽したツクシシャクナゲのほか、登山のイベントなどで植えられた



写真 3-15 1号磨崖梵字仏



写真 3-16 十一面観音が祀られた小祠



写真 3-17 鳥居跡と竈門山碑